

AACサウンドパフォーマンス道場プロジェクト 2006-2014 報告書



プロジェクトの背景と趣旨

愛知芸術文化センターでは、音を用いた新しいパフォーマンス作品を公募し、若手アーティストを応援するプロジェクトを2006(平成18)年度より開始しました。

愛知県の文化政策に関連して

愛知芸術文化センターを会場に、2006年(平成18年)から、3つの若手アーティスト育成支援事業が始まりました。「新進アーティストの発見inあいち(現・アーツチャレンジ)」(主催:愛知県ほか、対象ジャンル:現代美術、舞踊、音楽、のちに現代美術のみ、会場:館内の様々なオープンスペースほか)、「あいちの未来を紡ぐ!コンサート(現・若き音楽家による企画コンサート)」(主催:愛知県文化振興事業団、対象ジャンル:クラシックコンサート、会場:コンサートホール)、そして、この「AACサウンドパフォーマンス道場プロジェクト(以下、AAC道場)」(主催:愛知芸術文化センター企画事業実行委員会、対象ジャンル:音楽パフォーマンス、会場:小ホール)です。

これらは、愛知芸術文化センターを設置し運営する愛知県の芸術文化の方針、「県民の創造的文化活動への支援」(「愛知文化芸術行動プラン」平成15年-19年)や「文化芸術を担い、支える人づくり」(「文化芸術創造あいちづくり推進方針」平成19年-25年)に基づき進められてきた取り組みで、対象ジャンルの異なる3つのプロジェクトが始まりました。

AAC道場について言えば、「愛知の特性に応じたメディア芸術に関する事業展開」(「愛知文化芸術行動プラン」平成15年-19年)も視野に入れての開始でした。

地域の状況と、現在の状況に合わせて

愛知県では、この地域の特性として、音楽大学・芸術大学音楽学部だけでなく、テクノロジー系のアートについて学べる大学・大学院も複数あり、現代の多岐多様な表現を模索する環境があります。けれども大学や大学院を卒業した後、若いアーティストたちは、発表し研鑽を積む場や機会を自ら見出したり、作り出すしかありません。クラシック音楽やその流れを組む現代音楽作曲コンクール、また現代美術のコンペティションと比べると、こうした新しいパフォーマンスを対象とするコンクールやコンペティションは限られています。

ジャンルの形にとらわれない新しい表現の可能性を広げ、評価や発表の場を設けることで、作品を創りこみ、洗練させてゆく場。AAC道場は、これまでコンテストにあまり縁がなかったこのようなアートの動向にターゲットを絞り、若いアーティストのための登竜門となることを目指して開始しました。

研鑽の場・創造の場としてのAAC道場

そこで、通常のコンペティションやコンクールとは違ったユニークな試みを目指し、次の2つを趣旨(目的)としました。

① 作品を仕上げてゆくプロセスを重視し、公開で議論し試行を重ね、上演までにブラッシュアップを進める

作品制作のプロセスは、普通はブラックボックスの中にあって見えません。しかし、そこには、何かを創造するとき多くの人が共通して直面する問題群が見え隠れしているはず。このブラックボックスを開き、出演者だけでなく観客と一緒に問題を発見し、議論する場にしたいと思いました。

また、近年ダンスや演劇公演においては、ワークイン・プログレスと呼ばれる手法をとり、作品が完成する前の段階から観客の前で上演を重ねることにより、より完成度の高い作品を創作することが行われています。

これに習って、本プロジェクトでは、企画書により選考した入選作品に対し、本公演での上演までに、プレゼンテーションや本公演でのテスト上演などのブラッシュアップ・プログラムを必ず経てもらうことにしました。

② 愛知県芸術劇場小ホールを、単なる上演場所ではなく、作品の一部にする

そのために応募者に、会場となる小ホールの技術仕様を公開・説明し、舞台技術スタッフには最初からブラッシュアップに関わってもらうことにしました。均質な条件で単に優劣を競うのではなく、このホールならではの可能性を存分に引き出した個性的な作品が生まれることで、名実共に愛知からアートを発信することができればと考えました。

小ホールの技術仕様についての説明は、第4回までは「小ホール舞台技術ワークショップ」という形で講義と打ち合わせを兼ねた催しとして開催し、第5回からはアーティストごとに個別に会場下見と打ち合わせという形で行い、若いアーティストの希望を踏まえた上での様々な提案を行いました。

主催	愛知芸術文化センター企画事業実行委員会(愛知芸術文化センター、中日新聞、東海テレビ放送)
企画制作	愛知県文化情報センター
協力	情報科学芸術大学院大学(IAMAS)(第1~4回)、名古屋学芸大学(第1~4回)、名古屋市立大学芸術工学部(第1~4回) よろずアートセンターはち(第1、2、4、6回)、KDハボン(第3回)
後援	日本電子音楽協会(特別公演を除く全公演)
助成	文化庁(全公演)、(財)アサヒビール芸術文化財団(現・(財)アサヒグループ芸術文化財団)(第1、2、特別公演2011年、5、6回、特別公演2014年) (財)ロームミュージックファンデーション(第1回、特別公演2011年)

企画案の募集

6月～7月上旬

選考委員による書類選考・ 上演作品の決定

7月下旬

ブラッシュアップ・ プログラム

8月中旬～9月上旬

本公演、公開講評& 審査、表彰式

愛知県芸術劇場小ホールで上演する、音を用いた20分以内のパフォーマンス作品の企画案を募集。

応募者(代表者及びグループの場合はメンバー半数)の年齢条件として、35歳以下の若手を対象。

キーワードとして、身体、パフォーマンス、音、テクノロジーの4つを掲げ、この観点をどのように作品で取り扱うか、考え抜いた企画案を期待した。

選考委員会を開催し、入選等上演作品を決定する。

入選の選考基準としては、企画案の4つのキーワードに対してどのようなアプローチがなされているか、企画の完成度だけを見るのではなく、アイデアの発展性を重視し、この道場プロジェクトの趣旨でもあるブラッシュアップのプロセスを通して更なる展開が期待できる、チャレンジ精神に溢れたものを選んだ。

小ホール舞台技術ワークショップ / 8月中旬

【愛知芸術文化センター愛知県芸術劇場小ホール】

舞台・照明・音響について、舞台スタッフが、それぞれの基礎知識と、本公演会場となる小ホールの特徴について解説。第4回まで行ったが、応募企画によって必要な舞台技術に関する情報が全く異なること、たった2回のプレゼンテーションを中心に作り上げる作品では小ホールの舞台設備に関する知識を得て作品の質を高めていくことは難しく、ワークショップで新しく得た情報があまり活用されていないこと、AAC道場入選者以外の受講者ばかりが増え開催の意図が曖昧になってきたという理由により、第5回からはこのワークショップは開催せず、アーティストごとに会場下見とスタッフとの打ち合わせを行った。

プレゼンテーション1 / 8月下旬

【近隣のオルタナティブ・スペース】

入選者による企画のプレゼンテーションに対して、選考委員や舞台スタッフ、観客がアドバイス、質疑応答する公開イベント。大学のゼミのように、各企画について発表者を囲んで丁寧に質疑応答を重ね、時間や体裁を気にせず議論を続けるため、会場を、愛知芸術文化センター内ではなく、近隣のオルタナティブ・スペースで飲み物を片手に開催した。プレゼンテーション終了後も、選考委員を囲んでざっくりぼろんな雰囲気ですらに討論は続いた。参加者はこの日に出た意見やアドバイスをそれぞれ持ち帰り、各自の作品をさらに磨きあげて行った。

プレゼンテーション2 / 9月上旬

【愛知芸術文化センター愛知県芸術劇場小ホール】

第1回プレゼンテーションからの発展や変化をふまえて、本公演会場でのテスト上演。舞台技術スタッフ(舞台監督、音響、照明)を交えて、本公演に向けて、具体的・技術的な打ち合わせと確認を行った。選考委員からそれぞれにアドバイスをもらった。

9月下旬もしくは10月上旬【愛知芸術文化センター愛知県芸術劇場小ホール】

入選企画の上演。作品の完成度、今後の更なる展開を期待して、選考委員の公開審査による「優秀賞」の選考、観客の投票による「オーディエンス賞」を決定した。

優秀賞受賞者には再上演の機会、オーディエンス賞受賞者には入場料の一部が賞金として授与された。



開催データ<道場プロジェクト>

第1回(2006年)

選考委員	佐近田展康(音楽家、サウンド・メディアアーティスト、名古屋学芸大学メディア造形学部准教授) 水野みか子(作曲家、名古屋市立大学芸術工学部芸術工学研究科准教授) 三輪眞弘(作曲家、IAMAS(情報科学芸術大学院大学)教授) 藤井明子(愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)		
企画案の募集	募集期間 6/1(木)～7/10(月) 応募数 18企画		
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程 7/24(月)		
ブラッシュアップ・プログラム	小ホール舞台技術ワークショップ	日程 8/24(木) 会場 小ホール	参加者数 21人
	プレゼンテーション1	日程 8/12(土) 会場 カフェ・パルル	観客数 22人
	プレゼンテーション2	日程 9/8(金) 会場 小ホール	観客数 2人
本公演&公開審査	日程 9/22(金) 会場 小ホール	観客数 150人	
その他	第1回優秀賞受賞者の再上演 3/11(日) 小ホールにて「新進アーティストの発見inあいち」事業にて開催した。		

<優秀賞>

福島諭『Vocalise for Soprano and Computer』



ソプラノ・ソロによるヴォカリーズと、ソリスト自身がコンピュータに信号を送って声を様々に変化させた音楽作品。小ホールの天井や両サイドのギャラリーにある既存のスピーカーを使いこなし、多チャンネルで空間全体を響かせた。

<入選>

松本祐一『テキストによる音楽劇』



あらかじめ行ったアンケートの結果を元に、その場でパフォーマーがパソコンに打ち込む日本語文字(テキスト)をスクリーンに映し出し、観客がテキストを読んで想像するイメージのストーリーと、映し出されたテキストの品詞に関連づけられた音による音楽劇。

<特別賞・オーディエンス賞>

holon『幻燈ダンス『11月の青～SPDパアジョン～』



OHPを使ってその場で液体を流し込んだり鉱物を配置することによって変化する美しく幻想的な映像、影によるダンス、エレキギターによる多様な音による、高いオリジナリティをもったコラボレーション・パフォーマンス。

<入選>

山口崇洋『音響書道-Sound Calligraphy』



書を書く動作と、その時に発生する様々な音をピックアップして構成するサウンドパフォーマンス。同時に、真上から吊るしたカメラで文字が描かれる様子をスクリーンにリアルに映し出した。

<入選>

EARTH MOVE『コクラコキシラ Coquilla Coquixilla』



作曲、ヴォイスとパーカッションとエレクトロニクス、打楽器としても使われるインスタレーション、そしてダンスが一体化したコラボレーション・パフォーマンス。

<奨励賞>

時間旅行楽団『回転少女』



5人のパフォーマーが、オノマトペ的な発声を、回転などの動作を規則に則って行ったパフォーマンス。音の拡声はPAによらずパフォーマー自身が手に持つラウドスピーカーで行い、身体の動きと発声の向きや大きさの関連をダイレクトに伝えた。

第2回(2007年)

選考委員	佐近田展康(音楽家、サウンド・メディアアーティスト、名古屋学芸大学メディア造形学部准教授) 水野みか子(作曲家、名古屋市立大学芸術工学部芸術工学研究科准教授) 三輪眞弘(作曲家、IAMAS(情報科学芸術大学院大学)教授) 藤井明子(愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)		
企画案の募集	募集期間 6/1(金)～7/20(金) 応募数 7企画		
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程 7/31(火)		
ブラッシュアップ・プログラム	小ホール舞台技術ワークショップ	日程 8/4(土) 会場 小ホール	参加者数 50人
	プレゼンテーション1	日程 8/11(土) 会場 カフェ・パルル	観客数 20人
	プレゼンテーション2	日程 9/19(水) 会場 小ホール	観客数 20人
本公演&公開審査	日程 10/6(土) 会場 小ホール	観客数 80人	

<優秀賞>

[b]Laptop orchestra 『Laptop Material』



コンピュータの“誤った”使い方によって発する音を使ったパフォーマンス。8台のパソコンを並べて、キーボードを破損したり、液晶画面を傷つける行為などによるリアルな音と、ウィルスによって破壊される際のイメージ音を組み合わせた。

<オーディエンス賞>

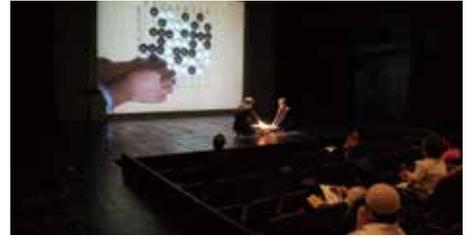
安野太郎『音楽映画第三番(名古屋)世界は律動でできている』



風景映像を投影し、そこに映る物や出来事を読み上げる声と、それをコンピュータ処理により変化させた音を重ねた作品。上演中何度も笑い声が聞かれた、独特の音の間合いが感じられた作品。

<入選>

シャア・R・スティーブン『でんでん太鼓囃協奏曲』



囃子の勝負に合わせて、観客がでんでん太鼓を鳴らして空間全体を響かせた、観客参加型パフォーマンス。

第3回(2008年)

選考委員	足立智美(パフォーマー/作曲家) 佐近田展康(音楽家、サウンド・メディアアーティスト、名古屋学芸大学メディア造形学部准教授) 水野みか子(作曲家、名古屋市立大学芸術工学部芸術工学研究科准教授) 三輪眞弘(作曲家、IAMAS(情報科学芸術大学院大学)教授) 藤井明子(愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)
企画案の募集	6/1(月)～7/10(金) 応募数 12企画
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程 7/31(金)
ブラッシュアップ・プログラム	小ホール舞台技術ワークショップ 日程 8/21(金) 会場 小ホール 参加者数 73人 ・オリエンテーション ・愛知県芸術劇場小ホールの舞台機構体験(舞台についての基礎知識) / 講師: 平井光一(愛知県舞台運営事業協同組合、CSS総合舞台) ・照明について(基本知識、照明機構の説明) / 講師: 福井孝子(愛知県舞台運営事業協同組合、若尾総合舞台) ・音響について(基本知識、音響機構の説明) / 講師: 大坂正晴(愛知県舞台運営事業協同組合、三光) ・質疑応答 ・キャットウォーク及び楽屋見学
	プレゼンテーション1 日程 8/22(土) 会場 KDハボン 参加者数 27人
	プレゼンテーション2 日程 9/10(木) 会場 小ホール 参加者数 33人
本公演&公開審査	日程 10/10(土) 会場 小ホール 参加者数 92人
その他	

<入選>

田島悠史+牟田高太郎+深澤瑠衣子『成長する音の断片』



ピアニストが鳴らした音によって、音に呼応するキューブ型の映像がばらばらから積みあがり、最後は色のグラデーションに並ぶ四角柱を作るようプログラミングされたパフォーマンス作品。

<優秀賞>

鈴木悦久『自動演奏ピアノのための組曲』



自動演奏ピアノとピアニストが、規則によって勝負がつく「ゲーム」を行うことによって、その双方向のコミュニケーションがテクノロジーとの本質的なアンサンブル作品となることを目指したパフォーマンス。音階的な奏法を中心に、他では聞かれない作曲作品となった。

<入選>

中上淳二『lightimagefourdance』



立方体型のスクリーンに映し出した映像や光と、多様な音の変化、立法体の中で踊るヒップホップダンサーの影や姿が一体となったパフォーマンス。

<優秀賞>

OO『Object』



ピアノ伴奏つき合唱の形をとるが、実は音は録音で、途中で音と演奏の振りがずれてゆき、舞台で行われている演奏は口パクだったことがわかるという、舞台公演を逆手に取ったシニカルなパフォーマンス。

第2回優秀賞受賞者による改定再演

[b]Laptop orchestra 『Mirroring』



優秀賞受賞者の形を継続しながら、パソコンを1台にして影と映像を組み合わせることにより、観客の視点が集中しやすく、より迫力が感じられるパフォーマンスを行った。

<オーディエンス賞>

徳久ウィリアム『VOIZ』



独自に開発した声のテクニック、世界中の様々な特異な歌唱法、発声法を様々に駆使し、声とマイク/PAによる新たな表現を追求したパフォーマンス。途中で照明を消して純粋に音だけのパフォーマンスしたり、天井付近のキャットウォークに移動して演奏するなど、小ホールの空間を隈なく生かした。

第4回(2009年)

選考委員	足立智美(パフォーマー/作曲家) 佐近田展康(音楽家、サウンド・メディアアーティスト、名古屋学芸大学メディア造形学部准教授) 水野みか子(作曲家、名古屋市立大学芸術工学部芸術工学研究科准教授) 三輪眞弘(作曲家、IAMAS(情報科学芸術大学院大学)教授)		
企画案の募集	募集期間 6/2(月)～7/10(木) 応募数 18企画		
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程 7/31(木)		
ブラッシュアップ・プログラム	小ホール舞台技術ワークショップ	日程 8/16(土) 会場 小ホール 参加者数 63人	・オリエンテーション ・愛知県芸術劇場小ホールの舞台機構体験(舞台についての基礎知識)／講師:平井光一(愛知県舞台運営事業協同組合、CSS総合舞台) ・照明について(基本知識、照明機構の説明)／講師:福井孝子(愛知県舞台運営事業協同組合、若尾総合舞台) ・音響について(基本知識、音響機構の説明)／講師:大坂正晴(愛知県舞台運営事業協同組合、三光) ・質疑応答
	プレゼンテーション1	日程 8/17(日) 会場 KDハボン 参加者数 24人	
	プレゼンテーション2	日程 9/22(月) 会場 小ホール 参加者数 50人	
本公演&公開審査	日程 10/4(土) 会場 小ホール 参加者数 69人		
その他	_____		

<優秀賞>

池田拓実『テーブルの音楽(Table Music)』



テーブル上に物を配置する行為を行い、そこから生じる音と、その様子をテーブルの真上から撮影するカメラによる映像を絡めて、物と関わる行為そのものをパフォーマンスとした作品。音及び映像共にコンピュータを用いて次々と加工し変化させていった。

<入選>

groove transformiste-INTER-DISCIPLINE;INTO-MUSIC-『LIVE Performance 10/09』



西洋楽器のアンサンブルによる作曲音楽を軸に、スクリーンに映し出される映像と、ダンサーの身体パフォーマンスを組み合わせ、最後はカオス状態を創り出した。

<オーディエンス賞>

Craftwife『クラフトワイフのコンサート』



二人の女性パフォーマーが小さなiPhoneを片手にコンピュータのプログラミングをコントロールし、小ホールの空間を生かして高さや奥行のある舞台を組み、映像による分身を映し出ししながら、演奏を行ったパフォーマンス。

<入選>

coup d'etats『Frictional noise』



日本武尊(ヤマトタケルノミコト)からインスピレーションを得た登場人物が、万華鏡のような描画と日本刀を用いたパフォーマンスを、ノイズ音のDJとともに即興的に行ったノイズ・アクションペインティング。

第3回優秀賞受賞者による改定再演

OO『Object/Process』



ピアノ伴奏を行う教師によるメソソプラノの歌唱レッスンという形を取った、やはり録音と生演奏について考えさせたシニカルなパフォーマンス。

第3回優秀賞受賞者による改定再演

鈴木悦久『Adagio for Disklavier自動演奏ピアノのためのアダージョ』



優秀賞受賞作の形を継続しながら、ピアニスト、自動演奏ピアノがそれぞれ単独に演奏を行ったあとで共演するという、対話の形が観客にとってよりわかりやすい構成と、一方で一層複雑なデュオを行った。

第5回(2011年)

選考委員	桜井圭介(音楽家、ダンス批評、吾妻橋ダンスクロッシング・オーガナイザー) 畠中実(NTTインターコミュニケーションセンター [ICC]主任学芸員) 山本裕之(作曲家、愛知県芸術大学音楽学部准教授) 藤井明子(愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)		
企画案の募集	募集期間 6/1(水)～7/15(金) 応募数 21企画		
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程 7/29(金)		
ブラッシュアップ・プログラム	プレゼンテーション1	日程 8/23(火) 会場 長者町・万勝S館 参加者数 60人	
	プレゼンテーション2	日程 9/10(土) 会場 小ホール 参加者数 25人	
本公演&公開審査	日程 10/2(日) 会場 小ホール 参加者数 57人		
その他	*関連事業 6/7(火)～11(土)「プラザシアター: AACサウンドパフォーマンス道場記録映像上映会」 会場 アートプラザビデオルーム 6/12(日)「こんな作品を待つ!- AACサウンドパフォーマンス道場で期待するもの」 会場 アートプラザビデオルーム 出演: 佐近田展康、三輪眞弘、山本裕之、藤井明子		

<優秀賞>

堀江俊行『ずれ木魚』



自作楽器(ずれ木魚)を一定のテンポでひたすら叩き、一方でコンピュータによって少しずつ変化した音を重ねてテンポをずらさせようとするという、奏者が自ら二律背反することを強いて、音を聞くこと自体が音楽を生み出すのではないかという疑問にアプローチした、単純ながら奥深い作品。

<オーディエンス賞>

垣尾優×高村聡子『一撃1200』



20分(1200秒)のあいだ、ダンサーと歌手が様々な身体動作と声と物音(金たらいに1円玉を投げ入れる音など)を用いて、観客も巻き込みながら、観客自身が多様な音を敏感に聴く状態にさせる、演劇的な作品。

<入選>

ヒッチハイカー(島村和秀×浜田洋輔)『ヒッチハイク』



自ら詠んだ俳句の朗読とフィールドレコーディングした音をコラボレートさせたサウンドパフォーマンス。

<入選>

井藤雄一『fmiSeq』



コンピュータからの映像出力を直接音響ミキサーに入力することで、フリッカーの映像とノイズ音が完全にシンクロした作品。

第6回(2012年)

選考委員	桜井圭介(音楽家、ダンス批評、吾妻橋ダンスクロッシング・オーガナイザー) 畠中実(NITTA インターコミュニケーションセンター [ICC] 主任学芸員) 山本裕之(作曲家、愛知県芸術大学音楽学部准教授) 藤井明子(愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター 主任学芸員)		
企画案の募集	募集期間	6/1(金) ~ 7/10(火)	応募数 17 企画
選考委員による書類選考・上演作品の決定	発表日程	7/30(月)	
ブラッシュアップ・プログラム	プレゼンテーション1	日程	8/25(土) 会場 カフェ・パレル 参加者数 28人
	プレゼンテーション2	日程	9/12(水) 会場 小ホール 参加者数 19人
本公演&公開審査	日程	10/6(土)	会場 小ホール 参加者数 80人
その他	_____		

<優秀賞>

Hyslom『Big one -パイプ- / Documentation of Hysterisis』



長さ4.8m、直径1.5mの鉄筒にバネを付けたオリジナルの巨大楽器の中に入り立ち上げたり身体全力で操作して音を出したパフォーマンス。時間をかけたフィールドワークを通じて身体に刻んだものから醸し出される動きとその結果生まれる音は、他には類を見ないパフォーマンスを創り出した。

<オーディエンス賞>

メガネ『SOUND OF ENERGY』



ボールダンスをすることによって発電し、アンプやラジカセ、LEDライト等を稼働させ、音と照明を操るパフォーマンス。発電機のノイズをマイクで拾い、自らの身体から発生させたエネルギーを音響に変換する、身体=エネルギー=音を感じさせた。

<入選>

memu『memu op.02』



記号が生命を創り出しているDNAのように人間の個と個を繋ぐ見えないシステムを表現するというコンセプトで、映像と人間の動きと音が連動するシステムを作り、多数のパフォーマーによって映像を駆使したパフォーマンスを行った。

<入選>

WARABI-696『WARABI-696』



フラビの着ぐるみを着たパフォーマーが、客席の間に設置した光に反応して音が鳴るデバイスを使って、観客に使い方を説明して参加させたり、自らコントロールして演奏したパフォーマンス。

第5回優秀賞受賞者による改定再演

堀江俊行『ずれ木魚』



ずれが更に多様なリズムや音色などの変化につながるよう優秀賞受賞作に改良を重ね、音は発せられると「音楽」になるのか、聴くことにより「音楽」になるのかという問いの中間に着目して、音楽の生まれる地平にアプローチした。

日時	2011年1月21日(土) 第1部:13:30~15:45 第2部:16:30~19:30		
会場	小ホール	入場者数	233人
概要	開催5年目の節目として行った特別公演。出演者は、選考委員によるパフォーマンス3組、道場オーディエンス賞受賞の4組、公募したノンセレクションの出演者8組の合計15組。内容は、テクノロジーの利用を様々な盛り込んだサウンドパフォーマンス、いわゆる現代音楽、即興セッション、ダンスや映像とのコラボレーション、さらにいずれの要素も含む/あるいはいずれにも属さないパフォーマンスが揃ったア・ラ・カルト公演となった。1アーティスト10分~30分の上演時間とはいえ、休憩時間を含めて合計6時間にも及ぶ長時間公演。選考委員を含めた出演アーティスト自身や鑑賞者が互いに様々な表現に出会うという目的は果たし、それぞれ興味を持つ演目やアーティストを見いだすことができた。なお、この公演に公募した出演者から、その後の道場入選者が現れることとなった。		

ゲスト(選考委員ほか)

■水野みか子『H-aki』

演奏:中川さと子(ヴァイオリン)、水野みか子(コンピュータ)



第1回から第4回まで選考委員を務めた作曲家、水野みか子による名古屋を代表するヴァイオリニストの一人中川さと子を迎えての、ヴァイオリンとコンピュータのための音楽作品。

■足立智美(ヴォイスほか)+田中悠美子(義太夫三味線)

『即興デュオ』



第3回および第4回選考委員を務めた足立智美と、義太夫三味線の演奏家田中悠美子による、多種多様に聴かせるデュオ。

■フォルマント兄弟『せんだいドンパ節』演奏:岡野勇仁(MIDIピアノ)

『NEO都々逸』演奏:岡野勇仁(MIDIピアノ)+田中悠美子(義太夫三味線)



サウンド・メディア・アーティストの佐近田展康と作曲家の三輪眞弘によるユニット「フォルマント兄弟」。佐近田と三輪は第1回から第4回まで選考委員。いずれの曲も、MIDIピアノの演奏(運指)により発せられる、合成された声による作品。

オーディエンス賞受賞者

■holon(幻燈ダンス)+福島諭(サウンド)『影 向-YÖGŌ-』



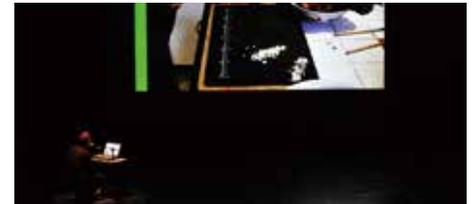
第1回道場オーディエンス賞受賞者と優秀賞受賞者によるコラボレーション・パフォーマンス。第1回以来、共演を重ねている、holonの幻燈(OHPによる映像)とダンスと、福島諭の深遠な音。

■徳久ウィリアム(ヴォイス)+竜巻太郎(ドラム)『即興デュオ』



第3回道場オーディエンス賞の徳久ウィリアムによる声と、名古屋拠点に活動する竜巻太郎によるドラムのデュオ。最初から最後まで暗闇のなかでの演奏。

■安野太郎『音楽映画 第十番』



風景映像と、そこに映る物や出来事を読み上げる声、その加工音によるパフォーマンス。今回はプライベート空間の映像を使った。

公募出演者

■MYK!!『CLAY MUSIC』



マリimbaとノイズを使用した音楽と、粘土を使用し人の手によってコートピア(理想郷)が作られ壊れていく様を表現した映像のコラボレーション。音及び映像処理にMax/MSPを使用。

■池田萌『improvisation for flute solo』



まるでフルートを演奏しているように“見える”、金属製のパイプを用いたヴォイス・パフォーマンス。演技と音の乖離を鑑賞者に問う。

■井藤雄一『fmi』



コンピュータから出力される映像信号を直接音声信号に変換する、音と映像のパフォーマンス。音と映像の関係がシンクロを超える状態になることを目指す。

■鈴木章裕(サウンド)+舞澤智子・下垣浩(パフォーマンス)

『metamorphosen-変容-』



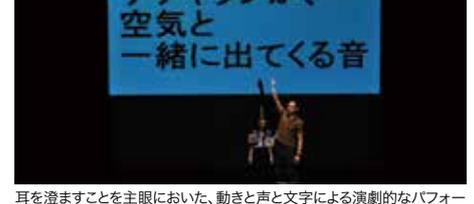
デジタルサウンドとアナログな身体によるダンスとのコラボレーション・パフォーマンス。

■馬場省吾+北條知子『コンピュータ同士の将棋対局における棋譜読み上げ』



タイトル通り、コンピュータ同士の将棋の棋譜を、二人の人間が読み上げる。

■垣尾優(動き)×高村聡子(歌)『息の先』



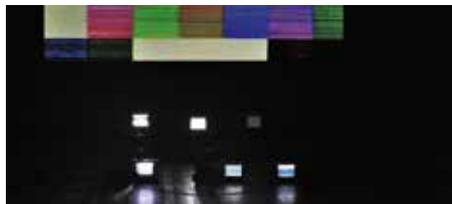
耳を澄ますことを主眼においた、動きと声と文字による演劇的なパフォーマンス。

■黒澤勇人『携帯電話のための5分間』



携帯電話を用いた観客参加型の作品。

■Electro-Acoustic Operation『T.V. show "R"』



テストパターンが映るブラウン管テレビモニターを積み上げたインスタレーションとそこから発せられるノイズ音。黒子のパフォーマー達がモニターを移動させることで、光と音に変化する、アナログ・パフォーマンス。

第4回優秀賞受賞者改定再上演

■池田拓実『テーブルの音楽(Table Music)』



テーブルの上に物を置いて音楽を演奏する、受賞作の改訂版。受賞後10回以上の上演を重ね、今回はカラフルな映像と、切れのある音とのコラボレーション。

日時	2014年2月11日(火・祝) 14:00-17:30		
会場	小ホール／フォーラムII	入場者数	107人
概要	特別公演の2回目で、オーディエンス賞受賞、優秀賞受賞したアーティストと、特別ゲスト2組によるパフォーマンスを合わせて上演。道場では、テクノロジーを駆使し映像と音をシンクロさせた形のパフォーマンスが多数登場したが、今回は、ことさらテクノロジーを感じさせるのではないパフォーマンス、身近にあるテクノロジーを用いるパフォーマンスを選び、これまで以上に多様な音のパフォーマンス4つを紹介した。それぞれ十分に時間を取り、観客には一つ一つのパフォーマンスを堪能してもらうことができた。		

第6回優秀賞受賞者による改訂再上演

Hyslom 『Big one -パイプ- / Documentation of Hysteresis』



パフォーマンスの構成はほぼ同様だが、1年を経て巨大鉄管楽器は風格が出た。また今回広くなったパフォーマンス・エリアにベニヤ板を広く敷き詰め、上に乗ったりバネを用いた音のパフォーマンスも長く充実。

コンセプト・構成・出演：加藤至、星野文紀、吉田祐

オーディエンス賞受賞者

垣尾優×高村聡子 『となりのひとの、足を踏む。』



第5回オーディエンス賞受賞者による声と物音によるパフォーマンス。段ボール箱という小道具と作りこんだ照明により、より演劇的な作品となった。

コンセプト・構成：垣尾優、高村聡子 舞台美術：ハナムラチカヒロ
出演：高村聡子

ゲスト

鈴木昭男+宮北裕美 『na ga re』



世界的なサウンド・パフォーマー鈴木昭男のソロと、近年特に重視しているダンサーの宮北裕美とのデュオ。流木、釘などのありふれた素材やアナラボスと称する音具を自由に操る鈴木演奏と、互いの気配を読み取りながら即興的に組み立てるダンスと音は、サウンドパフォーマンスの一つの集大成的な存在感があった。

作：鈴木昭男、宮北裕美 出演：鈴木昭男(音)、宮北裕美(動き)

ゲスト

The SINE WAVE ORCHESTRA



観客がスマートフォンやタブレット端末等、サイン波を鳴らすことのできる機器を使って音を出し、空間全体の響きを聴く、参加型パフォーマンス。会場は小ホールを出た吹き抜け空間のフォーラムII。くつろいだ雰囲気の中、小さな単純な1音が集まることで、大きな開放的な空間の響きを創り出した。

サウンドパフォーマンスのこれから

「音が核となる様々なパフォーマンス」という、敢えてゆるい枠組みで、通常のコンサートなどではこぼれ落ちてしまうような多様な作品も対象とする、AACサウンドパフォーマンス道場。テクノロジーの発達によってより多様な表現が可能となり、そうした様々な形のパフォーミング・アートを志す若手アーティストの育成を目的に開始したことは、冒頭の「プロジェクトの背景と趣旨」のところで述べたとおりである。8年の実施を経て思うのは、このゆるい枠組みこそが新しい表現の発表の場になってきたということだ。平たく言えばなんでもよし。王道だけでなく、思いがけない隙間に、これまでになかった表現の可能性が潜んでいる、目からウロコが2枚も3枚も落ちる(かもしれない)作品にこそ可能性を感じ、選考委員は入選をさせてきたのである。その結果、「声を出す」「楽器を演奏する」といった音楽の演奏が基になるパフォーマンスは元より、テクノロジーに直結する何らかのコンピュータを絡ませたパフォーマンス、そして演奏やテクノロジーを逆手に取ったコンセプトチュアルな表現…。それらを一堂に会させることで、発表の場を与えブラッシュアッププロジェクトを通し若手アーティストの成長を促すだけでなく、鑑賞者にとっても多様な自由さを実感できる場を、AACサウンドパフォーマンス道場は提供してきた。

これからのサウンドパフォーマンスの可能性や課題はいろいろと考えられるが、私はまずは表現の深化を挙げたい。新しい表現での足がかりは掴んだが、より多数の鑑賞者が納得し感嘆するところまで高めることができるか。そのためには様々な点でパフォーマンスの精度を上げなければならないだろう。約250席の小ホールという劇場は、実験的な作品にとっては、それなりに大きな劇場である。この空間をどのように使うことができるのかも課題だ。今後、引き続きサウンドパフォーマンスの多様な表現をさらに開拓し若いアーティストが作品を上演できるチャンスを設けてゆくとともに、可能性の感じられるアーティストにより完成度の高い作品を創作できるチャンスを設けていければと考えている。

藤井明子

AACサウンドパフォーマンス道場企画プロデューサー、選考委員
愛知県文化情報センター主任学芸員